



## 居場所づくりの現状と課題

西中, 華子

---

**(Citation)**

神戸大学発達・臨床心理学研究, 13:7-20

**(Issue Date)**

2014-03

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCOI)**

<https://doi.org/10.24546/81008865>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008865>



# 居場所づくりの現状と課題

## A Review on Research and Task in Support Methods to making “Ibasho”

西中 華子\*

Hanako NISHINAKA\*

**要約:** 本研究は居場所づくりとして行われている実践の報告、研究の概観を行った上で、それに基づき、居場所づくりの現状および今後の居場所研究における課題を明らかにしたものである。近年居場所づくりの実践は数多くなされており、その注目度の高さがうかがえる。しかし心理学における居場所の実証的研究と居場所づくりの実践の間には居場所や居場所づくりの捉え方に隔たりがあり、実証的研究の成果が実践に還元されていないことが懸念された。同様に心理学における居場所研究にも現在行われている居場所づくりの実践内容が反映されていないことが推定され、両者の溝を埋める必要性が示唆された。そこで今後実践に還元しうる居場所研究を行う上で、心理的適応や学校適応のレベルという視点からの居場所感の検討、対象者が「居場所がない」という感覚をもつ状況や原因の分析、居場所づくりを居場所感の促進と定義し居場所感の視点から効果の測定を行う実践研究の蓄積、児童期および青年期における居場所感の違いに関する実証的研究の4点が課題として見出された。

**キーワード:** 居場所づくり, 居場所感, 居場所欠乏感, 心理的適応, 学校適応, 発達段階

### 1. はじめに

近年、新聞や書籍、マンガや若者向けの歌の歌詞に至るまで、様々なところで居場所という言葉を目にするようになってきている。「居場所」とは大辞林(2003)によると、「人が居る所」「いどころ」とされている。このように現在でも居場所の辞書的な意味は、物理的な場所のことを指している。しかし上記で用いられている「居場所」の多くが、今自分が実際にいる場所や、部屋や家といった物理的な場所を表しているわけではない。これらは「心の居場所」と表現されるような心理的概念を指し示していると考えられ、居場所が一般的にも心理的な意味を含んだ言葉として広く用いられるようになっていくことがわかる。さらに心理学や教育の分野においても心理的な居場所についての議論が多くなされるようになり、その適応的な効果が期待されている。しかしその一方で居場所の概念について十分な共通理解がなされていないことが課題とされており、心理学の分野において居場所の概念に関する実証的研究が重ねられている(例えば杉本・庄司, 2006; 石本, 2010; 則定, 2008)。研究者によって主張が異なり、未だ議論の余地や課題は残されているが、居場所とは、落ち着く・ほっとするといった「安心感」や、受け入れられているといった「被受容感」、役に立っている・必要とされてい

るといった「役割感」や「自己有用感」、ありのままの自分でいられるといった「本来感」を感じられる対人関係のある場であると理解されつつある。つまり心理学における居場所とは、対人関係を中心に据えた概念といえる。さらには居場所と心理的適応や学校適応との関連についても実証的研究が蓄積されつつあり、その重要性が示されていると言えよう。

また教育の分野や行政、ボランティア団体によって、主に青少年を対象とした「居場所づくり」の実践も拡がりをみせている。そもそも居場所という言葉が頻繁に使われるようになったのは1980年代後半の不登校の増加が発端であり、学校に居場所がない子どもたちのための「居場所づくり」がいわれるようになった。1992年、当時の文部省は「登校拒否(不登校)問題について—児童生徒の『心の居場所』づくりを目指して—」という報告書において、学校が「心の居場所」である必要性を提唱した。さらに2004年、文部科学省は「子どもの居場所づくり新プラン」を打ち出し、3ヵ年計画で子どもの居場所を用意する計画を、国の政策として発表した。その中の主要な施策である「地域子ども教室推進事業」において、国は居場所づくりの具体的方略について以下のように示している。全ての小中学生を対象に、まず放課後や週末における学校の校庭や教室といった、①場所の提供、次にサッカーや野球などのスポーツ、むかし遊び、伝統文化の体験教室といった、②活動の実施、そして学校

\*神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期課程

教育関係者や PTA 関係者、地域の大人が運営協議会やボランティアスタッフとして参加する、③地域との交流・連携、の3つである。その後 2007 年に「地域子ども教室推進事業」は「放課後子ども教室推進事業」と改められ、厚生労働省の施策である「放課後児童健全育成事業」（放課後保育クラブ・学童保育）と一体化し、「放課後子どもプラン」と名称を変え、現在に至る。このような行政の施策に伴い、居場所づくりの実践は増加していったと考えられる。しかし文部科学省による居場所づくりの定義は曖昧で、先述の3つの方略は心理学における居場所の捉え方とは隔たりがある。そのため、現在この施策に基づいて行われている「居場所づくり」は、本当に対象者が必要としている居場所が提供されていないのではないかと危惧される。またこれらの「居場所づくり」において、居場所の定義および居場所づくりの定義、効果の測定が十分になされていない可能性が懸念される。

そこで本研究では、「居場所づくり」の実践に関する報告を含めた文献、および心理学、教育学分野における「居場所づくり」に関する事例検討や実践研究を概観することにより、居場所づくりの現状を明らかにする。それを基に、今後実践に還元されるような居場所研究を行う上での課題を示すことを目的とする。文献検索の対象範囲は、国立情報科学研究所の NII 論文情報ナビゲータ (CiNii) により、タイトルかキーワードに「居場所づくり」が含まれる実践の報告および、タイトルかキーワードに「居場所」が含まれる心理学、教育学分野の学術誌に掲載されている論文の中の「居場所づくり」に関する研究とした。

## 2. 困難を抱えた人への援助としての居場所づくり

居場所づくりが行われるようになったのは、先述の通り不登校問題に端を発する。その先駆けの実践が、いわゆるフリースクールとよばれる「東京シューレ」(尾木・奥地, 2001; 奥地, 2006) である。東京シューレは1985年に不登校の子どもの親たちがつくった、学校に居場所がない子どものために「学校教育が行われている昼間の時間帯に、子どもが学び、遊び、活躍する場」である。このようなフリースクールの立場による居場所づくりでは、学校に适应できない者に、学校復帰を目標とせず、学校以外の行き場を提供することを目的としている。同様の立場による活動が、神奈川県川崎市「フリースペースえん」(西野, 2006)、栃木県さくら市氏家公民館(橘川, 2013)においても報告されている。ここでは全てを自分のペースで行い決定するという、ありのままが許容される自由が提供されている。

同じく不登校の児童生徒を対象としている居場所づくりに、適応指導教室とよばれるものがある。フリースクールと適応指導教室の決定的な違いは、学校復帰を目標としているか否かである。必ずしも学校復帰を目標としないフリースクールに対し、適応指導教室は学校に居場所をつくるためのいわば練習の場である。仙台市適応指導センター「児遊の杜」「杜のひろば」では学校復帰を目標とし、個々の子どもの状態に応じた支援を報告している。さらに対象児童生徒の所属する学校機関や関係者に対するコンサルテーションなど、子どもを取り巻く環境の調整も行っている(野澤・相馬, 2004)。また北海道旭川市では1985年から小中学校の校内に不登校学級を設

置し、担任教師による支援が行われている。半澤(2004)は、旭川市内の小学校における不登校学級での実践を事例検討の形で報告している。ここでは教師がまず、「無条件の優しさ」を提供することにより、学校内における対象児童の安心できる居場所を築いていく。さらにその後、担任教師が「常に寄り添い、活動を共に」しながら徐々に他の子どもとの交流に慣れるよう支援し、子どもが自分で新しい居場所を築いていく力を身につけさせる。このような適応指導教室の立場からの居場所づくりとして、適応指導教室における教育相談を報告した田中(1992)、不登校児童に対する教師や親の支援のあり方について検討した中川(1998)、学校内におけるフリースペースの意義について論じた拝野・夏野(1999)、不登校支援施設「兵庫県立但馬やまびこの郷」における親子宿泊体験活動の実践、およびそこでのカウンセリングや箱庭療法を報告した住本・富永(2000)が挙げられる。これらにおいても、子どもに対する安心感の提供や受容的な関わりと同時に、学校関係者に対する働きかけが行われている。このようにここでは、子どもが社会の縮図ともいえる学校において、居場所を確保できるようになれることを重要視している。そのために、対象児童生徒には自力で居場所を築いていけるよう支援し、同時に学校や家庭といった環境にも働きかけを行っている。

さらに不登校をとりあつかったスクールカウンセリングや、学校に适应しづらい子どもに対する教育相談などの臨床事例の検討も、居場所づくりのキーワードと共に報告されている。田中(2001)は自身の長年にわたる高校生への教育相談活動を、居場所づくりの観点から報告している。その中で、本音で語り合える関係性を築くこと、生徒の気持ちを共感して受け入れることといったカウンセリング的関わりで生徒を支えることにより、不適応傾向のある生徒の居場所がつかれると論じている。川俣・河村(2007)は、高校のスクールカウンセラーとして不登校傾向にある女子生徒へ介入を行った報告において、女子生徒の学校における援助体制を整える過程を、居場所をつくり広げるといった観点から考察している。ここではまずスクールカウンセラーが対象生徒に寄り添い、学校の中での居場所となるような対人関係を築いた。その後複数の教師と連携して対象生徒への受容的な関わりを拡大し、学校生活への不安を軽減させていった。同様にスクールカウンセラーが学校内の居場所となり、不登校へのアプローチを行う事例として、齊藤(2008)による小学生男児への介入報告がみられる。ここでも、安心できる対人関係および安心して自己表現できる場所といった居場所の役目をカウンセラーと相談室が果たし、それを拡大していく試みが行われている。また不登校とは異なるが、鈴木(2003)はスクールカウンセラーとして非行グループに対する介入を行い、相談室が「感情表現の場」となるようにし、カウンセラーが受容的に関わることで、自尊感情や自己肯定感を回復していく過程を、居場所づくりとして報告している。以上のような不登校への介入としての臨床事例では、安心して、ありのままの自己表現が許され、受容的な関わりを感じられる対人関係が居場所として提供されている。

困難を抱えた者を対象とした、支援としての居場所づくりは、不登校支援だけに留まらない。札幌市中央勤労青少年ホームでは、不登校支援と平行し、引きこもりやニートに対する支援も行っている(粥川, 2008)。NPO 法人ニュースタート事務局においても同様に、

引きこもりやニートの青少年を対象に居場所づくりを行っている(藤沢, 2006)。ここでは、引きこもりやニートの青少年にコミュニケーション能力や職業的スキルの向上といった訓練を行うと同時に、対象者が「自分は必要とされて役に立つのだ」という感覚がもてるような関わりを提供している。同様に田川ふれ愛義塾では、遊び・非行型の青少年の社会復帰や学校復帰に向けた支援と同時に、「自分が認められ、便りにされ、必要とされ」と感じられるような関わりを提供している(中野・工藤, 2009)。同様の報告が、兵庫県 NPO 法人神戸オレンジの会(NPO 法人神戸オレンジの会, 2012)、野宿者を対象とした東京都台東区「グループホームふうせん」(角田, 2000)や非正規雇用者を対象とした民青同盟中央グループの取組(田中, 2009)、生活保護需給者を対象とした NPO 法人ふるさとの会(瀧脇, 2010)、犯罪を起こした少年を対象とした NPO 法人福岡県就労支援事業者機構(NPO 法人福岡県就労支援事業者機構, 2012)においてなされており、いずれも訓練的なサポートと共に社会の中での役割感の回復を目的としている。これらはいずれも自立支援や学校・社会復帰を最終的な目標としており、居場所を止まり木的な意味合いで扱っている。このような止まり木的な居場所をつくる実践として、虐待や DV などにより行き場のない者を対象とした、カリヨン子どもセンターでの取り組み(前田, 2007)、北翔大学の学生相談室における、休学後の復学を目指す学生や、個別の面接を申し込むほどではないが「居場所がない」という感覚を感じている学生の支援(斉藤・飯田・川崎, 2011)、薬物依存からの離脱を支援する施設であるダルクでの取り組み(南, 2012)が挙げられる。これらの報告では居場所づくりとして、安心・安全な場所、カウンセラーや職員による心のケア、社会復帰に向けた具体的な訓練活動が提供されている。

さらに困難を抱えた者への援助を「居場所」という言葉を用いて捉えている臨床事例も存在する。村瀬・重松・平田・高堂・青山・小林・伊藤(2000)は通所型中間施設における事例を取上げ、友人・スタッフ・家族による承認と、自信や有能感を与えるような関わりにより、「思春期・青年期の人々が育ち直り、社会へと巣立っていく」過程を、居場所という観点から考察している。花嶋(2011)は引きこもりの若者が居場所(ここではたまり場やフリースペースなどの中間施設を指す)を利用しながら職業生活を確立するプロセスを調査し、自分の気持ちを見つめる「長い時間」、「肯定的な視点を与えてくれる他者」、「困難を『回避しないで向き合う本人の姿勢』」が得られることの必要性を示した。これらの事例における居場所も、いつか巣立っていくための休息の場、止まり木的な場と捉えられている。一方矢幡(2003)は心理的居場所という観点から、クライアントの制作したコラージュや面接内容を解釈し、クライアントが安心できる安全な居場所を見つけ出す力を得たことから回復へ向かったとしている。このように臨床事例を「居場所」の観点から捉えた研究として、居場所のなさという観点から非行事例を解釈した廣井(2000)、過去の外傷体験から真の居場所を見つけられず不適応に陥ったクライアントの回復過程を検討した鈴木(2005)、などが挙げられる。これらの研究における居場所は、安心できるといった安心感が重視されているものが多い。

以上のように困難を抱えた者を対象とした居場所づくりでは、居場所感が感じられるような対人関係や関わりが提供されている。す

べての居場所づくりにおいて、安心できるといった感覚や受け入れられているといった感覚を与える関わりが共通してみられた。さらに提供する居場所を止まり木的なものと捉えている実践や事例においては、役割感や自己有用感といった感覚の提供が比較的重要視され、居場所づくりの先に社会復帰や学校復帰といった目標が定められている。一方で、いつでも帰ってこられるような拠り所としての居場所の提供を目的としているものでは、ありのままにいられるといった本来感が重視されているといえよう。

### 3. 「子どもの居場所づくり新プラン」をきっかけとした居場所づくり

不登校支援の立場による居場所づくりが増える一方で、文部科学省の「子どもの居場所づくり新プラン」をきっかけにした居場所づくりも数多く取り組まれている。

#### (1) 様々な年代の子どもを同時に対象とした居場所づくり

文部科学省が居場所づくりの対象を「全ての小中学生」と銘打ったことから、様々な年代の子どもを同時に対象とした居場所づくりが多数行われている。小学生から高校生までを対象としている、岩手県奥州市水沢区「ホワイトキャンパス」では、他世代や地域住民と子どもの交流、中高生の参画と子ども独自の運営を重視し、居場所づくりを行っている。具体的には、インターネットができるパソコン、テーブル、ソファ、こたつや図書、卓球台などの設備が設置された、安全な場所が提供されている(岩手県水沢市教育委員会, 2004; 大村, 2004; 上田, 2004; 李, 2011)。神奈川県川崎市「子ども夢パーク」においても子どもの意見を尊重した運営が重視され、安全な遊び場所の提供と、クリスマス会、餅つき大会など、子どもたち主催の行事が行われている(香山, 2005)。大阪府箕面市「らいとびあ 21」(池田, 2003)、東京都武蔵野市「けやきコミュニティセンター」(安藤・森・高石, 2005)、千葉県君津市「君津中央公民館」(布施, 2005)、兵庫県神戸市「からと里山ジュニアクラブ」(村田, 2007)、新潟県聖籠中学校における取組<sup>1)</sup>(高橋, 2005)や大阪市西成区「山王子どもセンター 子どもの家」(前島・井上, 2012)、でも同様のことが重視され、居場所づくりが行われている。

一方小中学生を対象としている山形県山辺町「作谷沢子どもクラブ」では、放課後の小中学生の交流は重視されているが、子どもの参画や自主的な運営については特にいわれていない。学校や公民館が放課後の遊び場や勉強の場として安心できる場所を提供し、お菓子作りや魚つかみ取り体験などの様々な活動を、大人が主催、提供している。ここでの安心とは「ほっとする」といった心理的な意味の安心感だけでなく、防犯面での安全といった意味も含まれており、背景に子どもを狙った犯罪の増加などが挙げられている。滋賀県「エコ・スクール・プロジェクト」(加藤, 2002)、栃木県烏山町「若鮎クラブ」(烏山子どもの居場所づくり委員会, 2004)や埼玉県嵐山町「嵐山地域子ども教室」(嵐山町青少年健全育成委員会, 2004)、国立山口徳地少年自然の家(小林, 2004)、大阪府豊中市「平和と

<sup>1)</sup> この実践は聖籠中学校内における居場所づくりの取組であるため、対象は主に聖籠中学校の生徒である。



共存のためのおまつり地球一周事業」(榎井, 2005), 東京都江東区「あそびの達人」事業(岩切, 2005), 奈良県吉野町「カンブリア文庫」, 「軒先あそび支援センター」, 「子どもスポーツ体験教室」, 「のらキッズ」, 奈良県奈良市「子ども・いきいき・サタデースクール」, 「紙飛行機・鳥凧教室」, 「くろかみやま自然教室」, 奈良県生駒市「いこまっこ教室」, 「宙」のあそび場 Don Don」(吉岡・高橋・岡澤, 2007), 沖縄県浦添市「港川自治会子ども教室」, 「仲西小学校子ども教室」, 「浦添市通学合宿」(丸谷, 2007), 北海道十勝郡「オーラポロひろば」(小路谷, 2009)においても同様に, 地域の人や世代間の交流を重視し, 物理的な場所と, 体験活動や遊びの機会などが提供されている。さらに NPO 法人などの民間団体による居場所づくりも見られる。大阪府大阪市「キッズ☆はらっぱ」では「時間内ならいつ来ていつ帰ってもいいフリースペース」であり, 遊び道具と物理的な場所が提供されている(浅井, 2006)。NPO 法人コドモ・ワカモノ ing による「移動式子ども基地」, 「環境デザイン」事業では, トラックに様々な遊び道具を載せて各地を回り, 遊びの機会を提供している(星野, 2012)。

このように様々な年代の子どもを同時に対象とした居場所づくりでは, 異年齢間の交流が重視されているものが多い。また高校生が対象に含まれている居場所づくりでは, 子どもたちの意見を尊重した活動や運営を行うことを重視しているものが見られる。一方で小中学生を対象にしているものでは大人が考えた楽しい活動と, 安心して遊べる遊び場の提供が中心になされている。これは文部科学省(2004)の「地域子ども推進事業」の内容を基に実践が行われているためであろう。このように様々な年代を同時に対象として居場所づくりを行うねらいは, 小学生から高校生といった他世代同士の交流にあると考えられる。それにより年長者は責任感や役割感を獲得し, 年少者は年長者から対人関係の築き方や価値観の多様性を学ぶとされているが(例えば岩手県水沢市教育委員会, 2004; 上田, 2004; 前島・井上, 2012), 効果の測定は実質なされていないため, 多世代交流が子どもたちにもたらすメリットについては不明である。

### (2) 中学生(青年期)を対象とした居場所づくり

一方で長野県茅野市こども館「CHUKO らんどチノチノ」は, 中学生のみを対象として居場所づくりを行っている。中学生に利用を限定することで, 「中学生が使いたい」『かっこいい』『かわいい』ことができる施設」ができるとしている。他世代との交流活動なども基本的には設けておらず, 対象者の自主性に任せ, やりたいことができる自由な場であることを重視している。さらに教師や親といった, 青年期の子どもが反発心を抱きやすい対象とはあえて連携せず, 安心して悩みを相談できる場となるようにしている。親や教師世代よりも子どもたちと年代の近いスタッフが, 受容的な関わりと見守りを提供することにより, 中学生にとって利用しやすい居場所となっている(川上, 2008)。中学生を対象とした居場所の先駆けとされる, 東京都杉並区「ゆう杉並」も「児童館は小学生や小さい子が中心で, 自分たちの居場所という感じがしない。地域の区民センターに行くと, 大人が中心で, 何か悪いことをするんじゃないか, という目で見られてしまう」という子どもの声を尊重し, 対象を中学生に限定している(東京都杉並区児童青少年センター, 2000; 横関, 2006)。これらの居場所づくりには, 建設の段階から中学生が参画

し, 多目的広場, ダンス練習室, スタジオ, 学習室など, 中高生の要望を反映した場が提供されている。「特に目的を持たずにその日の気分でおしゃべりするなどして過ごしても良いし, スタジオでバンド練習をする, ホールでダンスの講習を受けるなどの目的を持って来館しても良」く, 子どもが自由に過ごすことを重視している。愛知県高浜市「バコハ(バンド・コンピューター・ハウス)」(鶴殿, 2006)や, 愛知県日進市「じゅねぶろ(THE NEXT GENERATION RAISING PROJECT)」(福安, 2007), 東京都港区赤坂子ども中高生プラザ, 東京都新宿区榎町児童センター, 東京都調布市青少年ステーション「CAPS」(近藤・定行, 2005), 「MONDAY ROOM 北 遊魂」(内山, 2013)においても同様に, 子どもの参画や自由が尊重されている。さらに中島・吉川・山中(2011), 中島・山中・松崎・井上(2013)は, 公共施設が中高生の居場所となるための要因について, 施設の利用状況の調査を通して検討している。その中でも, 大人が主体となって企画・運営する行事の提供ではなく, 中高生が主体となった運営・企画が重要であると論じられている。

このように中学生を対象とした居場所づくりでは, 施設設備から行事・活動, 運営に至るまで子どもの参画や自由が重視されており, 対象者の意見を取り入れていることが特筆すべき点であると考えられる。しかし, 対象者に意見を聞く際の問いは「どんな施設がほしいか」(東京都杉並区児童青少年センター, 2000)であり, 対象者の「居場所」を質しているのではないことに懸念が残る。そもそも居場所づくりとは「居場所がない」という感覚をもち, 居場所を必要とする者に対して, 必要としている居場所を提供することであると考えられる。そのために対象者に問うべき内容は「どのような施設がほしいのか」ではなく, 「居場所がない」という感覚をもつ状況や原因である。居場所づくりではそれを補う手立てを検討し, 提供する必要がある。これに関連し, 「CHUKO らんどチノチノ」の実践では, スタッフの子どもへの関わり方が詳細に検討されている点が特長的である。親や教師とはあえて連携せず, 年代の近いスタッフを配置し, 悩みを相談しやすい環境を設定することや, 受容や共感を基本にした関わり方を重視し, それらの提供を一貫して行っている。この実践は上述したような中高生の居場所のなさを実証的に調査・分析した上で行われているものではないが, このような環境設定や関わりの提供は中高生の居場所づくりにおける重要なポイントではないかと考えられる。

### (3) 小学生を対象とした居場所づくり

さらに小学生を対象にした居場所づくりも数多く行われている。東京都品川区「すまいるスクール」は居場所を「放課後や学校の休業日に子供達が友達と一緒にのびのび・生き生き過ごせる」場所と捉え, 居場所づくりを行っている。具体的には, 学校施設を放課後や学校の休業日に利用できる安心・安全な場所として提供している。さらにオセロ, すごろくなどの集団遊び, 折り紙やお絵かき, 学習, スポーツなど, 子どもたちが楽しく自由に過ごせるような設備を用意している。また勉強会や英会話教室, 手話教室, パソコン教室, 料理教室などが地域ボランティアにより行われ, 子どもたちが自由に参加できるようになっている。「いろんな遊びができる, いっぱい遊べる, 力をふり絞って遊べる」ところにする。遊びの中で『できた

あ』という喜びや感動が得られる遊び、明日に夢や目標をもってぐっすり眠れるあそびができるようにする」ことを重要視しており、「いつも遊び相手がいる場所をつくる。一人で遊ぶよりも仲間と一緒に遊ぶ楽しさを体験させ、異学年の友達ができる集団遊びが自然に生まれるようにする。子供だけの社会、子供だけの生活集団・遊び集団が自然発生的に生まれる場をつくる。自立心や社会性を育てる」ことを目的としている(今野, 2003; 東京都品川区教育委員会, 2004)。東京都江戸川区「すくすくスクール事業」(江戸川区教育委員会, 2003), 大阪府大阪市「児童いきいき放課後事業」(大阪府教育委員会, 2004), 大阪府レクリエーション協会「あそびの城づくり」(伴・田村・片倉・相奈・植木, 2008), 愛知県名古屋市「トワイライトスクール」(名古屋市教育委員会, 2004; 榎原, 2004), 山口県下関市「清末・あそびっ子・クラブ」(下関地域子ども教室実行委員会, 2004), 佐賀県牛津町「津の里ミュージアム」(津の里ミュージアム実行委員会, 2004), 兵庫県尼崎市「子どもクラブ事業」(西, 2004), 群馬県榛東村「北小地域子ども教室」(榛東地域子ども教室実行委員会, 2004), 東京都世田谷区「新 BOP」(東京都世田谷区教育委員会, 2004; 田中, 2007a, 2007b), 福岡県小郡市「くろつちアンビシャス広場」(深山, 2005), 「小郡子ども広場」(荒川, 2005), 徳島県徳島市「川内南地域子ども教室」(島川, 2005), 徳島県高松市「めぐみ子ども会英会話クラブ」(全国子ども会連合会, 2005), 熊本県宇城市「ジュニア・リーダークラブ活動」(全国子ども会連合会, 2005), 地域子ども教室モデル事業 神奈川県横浜市「エジソン・アインシュタイン・クラブ」, 「生活技術向上クラブ」(全国子ども会連合会・子どもの居場所づくり 16 年度報告書, 2005; 全国子ども会連合会, 2005), 「はまっ子ふれあいスクール」(猿渡, 2008), 愛媛県四国中央市立金生第一小学校「ほんわかくらぶ」(川井, 2005), 広島県廿日市市立宮内小学校「平賀源内・野口英世倶楽部」(全国子ども連合会, 2005; 広島県廿日市市立宮内小学校, 2006), 青森県南郷村「伝承芸能田代えんぶりクラブ」(全国子ども会連合会, 2005), 香川県吉野川市「くりこまフレンドクラブ」(全国子ども会連合会, 2005), 香川県高松市「亀阜校区放課後子ども教室」(時岡・岡本, 2011)においても、学校施設の開放や同様の活動が実施されている。さらに公民館や児童館、地域の住民や大学、企業の手による類似の居場所づくりも数多く行われている(例えば坂本, 2000; 深山, 2005; 益川, 2005; 文部科学省, 2005; 棟方, 2005; 難波, 2005; 北海道岩見沢市教育委員会女性青少年課, 2007; 神田, 2007; 西村・西村, 2007; 徳谷, 2009)。いずれも安心して遊んだり学習したりできる物理的な場所と子どもが楽しめるような体験活動の提供により、遊びを通じた楽しさの体験や、異年齢の交流、やる気や充実感の獲得が重要視されている。

これらの報告では活動についての記述は詳細だが、居場所づくりの定義や目的について曖昧なものが多く、何をターゲットとした実践なのか定かでない。効果の測定についても、参加した子どもや地域住民、保護者の感想や、事業に対する満足度を検討したもの(例えば請川・高橋・滝澤・結城・中川・中市, 2009)がほとんどであり、そこから小学生の居場所がつけられたかどうかを判断することに懸念が残る。そのため行われている実践が子どもたちにとって何らかの適応的な効果をもたらしていたとしても、その要因が何なのか、行われた実践を居場所づくりと位置づけて良いのかといった疑

間が残る。猿渡(2008)は、神奈川県横浜市における「はまっ子ふれあいスクール」の効果検討を質問紙調査により行っているが、用いている尺度が道徳性の発達段階を測定する尺度やエゴグラムであることに疑問が残る。前述のとおり居場所づくりとは居場所を必要とする者に居場所を提供することであると考えられるため、検討すべき点の対象者の居場所が形成されたかどうかという点であろう。そのため居場所づくりの効果検討として道徳性発達の程度や自我状態を測定することには矛盾があるのではないかと懸念される。

#### 4. 学級経営やプログラムとしての居場所づくり

以上のような居場所づくりの実践が増加するなかで、学校教諭による学級経営や子どもへの関わり方を居場所づくりの観点から検討している研究や報告も多くみられるようになってきている。山田(1998)は自身の学級経営の経験から、「一人ひとりの子どもに合った指導をする」こと、「一人ひとりの良さに目をむけ」、それぞれの子どもが主役になれる機会を与えることが、学級を子どもの居場所にするための要因であると論じた。高地(2010)は、子どもから信頼の厚い小学校教諭の子どもへの関わり方を分析し、学級を子どもの居場所とするための視点を導き出している。ここでは『子どもの言葉を尊重した言葉かけ』を行い、子ども主体の学級づくりを行うこと、「教師の価値観を押し付けないこと」、子どもを褒める際に、周りの子どもも納得できるような良さをみつけ、積極的に褒めることが大切であると結論づけている。安達(2012)は、学級における気になる子どもの居場所をつくるための具体的方略について論じている。ここでは対象児童に対する配慮や個別の対応だけでなく、学級に所属するすべての子どもに対する十分な情報収集と、大切にされているという感覚の提供が必要であるとしている。小久保(2012)も同様に、気になる子どもの居場所づくりについて論じる中で、対象児童とその保護者への関わりと共に、学級全体が児童の居場所となる風土づくりの重要性を指摘している。そのための具体的な実践例として、児童同士がお互いの良いところをみつけ発表し、さらにその発表を担当教師が褒める、という関わりを紹介している。同じように、学童保育における指導員の関わりを報告したものもみられる。矢吹(2006)は、自らが指導員を務める岡山県岡山市の学童保育「たけのこクラブ」で出会った、広大という少年との関わりを取上げ、居場所づくりの観点から考察している。ここでは居場所を「いつも来たいと思える場所」とし、一人ひとりの子どもが活躍できるような場面を作る関わりを目指している。また中学生以上を対象としたものとして、松田(2010)は、居場所となるような学級をつくるための学級経営の方法について論じている。ここでは國分(1992)の開発した構成的グループエンカウンターで用いられている「エクササイズ」の具体例(諸富・浅井・明里・植草・斉藤, 2002)を紹介し、新学期の学級びらきへの活かし方を提案している。その他にも学校における子どもへの関わり方を居場所づくりの観点から捉えている報告として、中学校における学校経営のポイントを論じた我謝(1999)、小学校における学級経営の事例を報告した園田(2001)、中道(2001)、板橋(2001)、角川(2001)、森口(2001)、谷口(2001)、兵庫県教職員組合(2001)、田中・松浦(2001)、小学校における総合学習の事例を報告した園田(2006)、和田・後藤・阪本(2006)、



堀 (2006), 八尾市立桂小学校 (2006), 板橋 (2006), 定時制高校における非行に走る生徒たちへの関わりを報告した平野 (2007), 高校における自身の学級経営方針を, クラス替えを例に挙げて論じた青木 (2012), 中学校における, 特別支援学級の生徒が所属する部活動での顧問経験を報告した山口 (2012) が挙げられる。このように学校における教師の関わりとしての居場所づくりには, 子ども一人ひとりに目を向け, 子どもの活躍できる場を設け, 良いところを褒める, といったことが重視されているといえる。

また学校における居場所づくりの実践研究も行われている。松田 (1997) は, 居場所感を「リラックス」「やりがい」「プライベート」の3要素から捉えた。その上で, 3要素のうちの「やりがい」要素を促進する居場所づくりを検討し, 高校生の社会科授業において, ジグソー法を用いたグループ学習を3年間にわたり実施した (松田, 1999)。ここではあらかじめ居場所感の要素を実証的に検討した上で, 居場所づくりの方法を考案している点が強みである。一方で居場所づくりを居場所感の促進と捉えて実践を行っているにも関わらず, 居場所感の観点から効果測定を行っていない点が課題であると考えられる。さらに木下 (2013) は小学校5年生を対象とし, Q-Uテスト (河村, 1998, 1999) および杉本・庄司 (2006) の居場所の心理的機能尺度を基に作成した居場所感尺度によるアセスメントを行い, それに基づいて介入方法を検討・実践している。さらに実践の事前と実践中にも質問紙調査を行い, 各尺度得点の変化から効果検討を行っている。このようにここでは, 児童の居場所感の実態をアセスメントした上でそれを補う手立てを検討し, 実践を行っている点, および居場所感の観点から効果の測定を行っている点で, 居場所づくりの研究に多大な示唆を与える画期的な研究であると考えられる。一方でこの研究には研究方法の点で以下の重大な問題がみられる。第一に, 用いている居場所感尺度の項目選定についてである。ここで用いられている居場所感尺度の項目は, 杉本・庄司 (2006) の尺度より10項目を選定したものであるが, どのような基準で項目を選定したかが明確にされていない。第二に居場所感尺度の信頼性, 妥当性が検討されていない点である。第三に杉本・庄司 (2006) の尺度が「居場所の機能」を測定している尺度であるのに, それを基に作成された尺度が「居場所感」を測定しているという矛盾である。最後に尺度項目の表現についてである。杉本・庄司 (2006) の尺度の対象は小学生を含んではいるが主に青年期を対象とした調査により作成された尺度であるため, 項目の内容を概観すると小学生に対してはやや難解であると考えられるものがみられる。しかしここではそれらの項目もそのままの表現で用いられており, 尺度項目の表現方法に対する吟味が十分に行われたかどうか懸念される。これらのことから, ここで用いられている居場所感尺度が小学生の居場所感を測定しているとは断言できず, 結果的に効果測定の意義が薄れていることが危惧される。さらに, 効果の測定はなされているが統制群が用意されていない点や, 実践内容の検討が居場所づくりの先行研究を概観および吟味した上でなされていない点も問題であろう。以上のような点で課題は残されているが, このように居場所づくりを居場所感の促進と捉え, 実践の前後に居場所感の観点から効果測定を行うことは, 居場所づくりの研究を蓄積していく上で重要なポイントであると考えられる。

さらに, 居場所づくりのプログラムとして様々な活動を提案して

いる実践報告もみられる。河原塚 (2006) は居場所づくりの目的を「楽しく人と関わる」体験を促すこととし, 自らの実践で用いている, 「友だちを互いに認め合う, 楽しく, 気持ちよい感覚を得られる」エンカウンターグループ様のゲームを提案している。石沢 (2013) は「美術には, 考え方の違いを肯定的にとらえ, 認め合う力」があり, 『「みんな違って, いいよね」』と思える関係をつくる力がある」と主張している。その上で一人ひとりが自らの考えをありのままに表現し, 認め合える機会の提供を目指した, アートワークショップによる居場所づくりの実践報告を行っている。これらの報告も, 居場所づくりの定義や効果検討の点で課題は残るが, 今後の居場所づくりの実践研究を行う上での参考になると考えられる。

## 7. まとめと今後の展望

以上の他にも, 乳幼児や子育て中の親を対象とした居場所づくり (大島, 2001; およこの広場びーのびーの, 2001; 岐阜民間保育園カリキュラム研究会・奥, 2004; 吉岡・佐々木, 2004; 浅井, 2006; 彗田・黒野, 2006; 請川, 2008; 竹内・上野・前田・玉村・越野, 2009; 徳谷, 2009; 横山・長谷川・竹内・堀越, 2012), 中期や高齢者を対象とした居場所づくり (新井, 2003; 池田, 2004; 神谷, 2005; 小泉, 2005; 松本, 2005; 村山・佐藤, 2005; 岡村, 2005; 乾・延藤・藤田, 2006; 川口, 2006; 上條, 2007; 倉島, 2007; 阿部, 2010; 西村・藤井, 2010; 埼玉県志木市, 2010; 福岡・大井, 2011; 山路, 2011; 笠松, 2012; 松本・宮澤, 2012; 吉川, 2013), 障害児者を対象とした居場所づくり (金地・角井・木村・太山, 1998; 青木, 2000, 2004; 河田, 2001; 加登田, 2002; 川島, 2004; 兼松, 2005; 文部科学省, 2005; 横田, 2005; 小川, 2006, 2009; 川本, 2008; 桑田, 2008; 植戸, 2008; 小西, 2009; 関原, 2009; 高橋, 2010; 神奈川県NPO法人でっかいそら, 2011; 越野, 2011; 鈴木・石崎, 2011), 在日外国人やその子どもたちを対象とした居場所づくり (矢野, 2006; 清水, 2011; 末藤, 2011), 地域住民のための居場所づくり (天野・清水・二瓶・天野, 1999; 福山, 2003; 倉持, 2010; 藤本, 2012; 大橋・志村, 2013), 建築分野における居場所づくり (金丸・渡海・鈴木・舟橋・木多, 2000a; 金丸・渡海・鈴木・舟橋・木多, 2000b; 渡海・金丸・鈴木・舟橋・木多, 2000; 今西, 2001; 金丸・渡海・鈴木・舟橋・木多・李, 2001; 増田, 2001; 門谷・佐藤, 2002, 櫻木・斎尾・藍澤・瀧川, 2002; 五十嵐・定行, 2004; 近藤・定行・五十嵐, 2004; 三輪・藤岡・高見沢・佐戸原・田村, 2004; 中崎, 2004; 趙・小伊藤, 2005; 池谷・木下・今井, 2005; 木下・池谷・今井, 2005; 近藤・定行, 2005; 頼・松本, 2005; 佐藤・早川, 2005; 長谷・斎尾, 2006; 本庄・渡辺・三橋, 2006; 川淵・福田, 2006; 盛永・片方・小伊藤・廣瀬, 2006; 渡辺・三橋・本庄, 2006; 本庄・渡辺・三橋, 2007; 生田・定行, 2007; 近藤・定行・生田, 2007; 斎尾・長谷, 2007; 渡辺・三橋・本庄, 2007; 木下・池谷・今井, 2008; 本庄・渡辺・三橋, 2009; 松本・中山, 2008; 兼松・藤岡・大原・三輪, 2009; 松本・中山, 2009; 本庄・三橋, 2010; Khasawneh・Kato・Shibayama, 2010; 駒井, 2010a; 駒井, 2010b; 松本・中山, 2010; 安川・細田, 2010; 馬上・横内・岡田・川島, 2011; 時岡・岡本, 2011a; 時岡・岡本, 2011b; 安川・細田, 2011; 東内・大垣・前

田, 2012) など, 数多くの報告が行われている。研究分野や対象により居場所づくりが行われている背景や重要視されているポイントは異なるが, 概ね対象者の適応や QOL の向上などがターゲットとされている。このように居場所づくりの実践や研究はあらゆる年代を対象に行われている。また心理学や教育の分野ではもちろんのこと, 建築や福祉といった数々の分野で行われており, その注目度の高さがうかがえる。しかしながら居場所づくりの実践報告や研究を概観した結果, 心理学における居場所の実証的研究と居場所づくりの実践の間には居場所(または居場所づくり)の捉え方に隔たりがあるように推定された。これは居場所の実証的研究の成果が, 実践に還元されていないことが原因ではないだろうか。同様に心理学における居場所研究にも, 現在行われている居場所づくりの実践内容が反映されていないことが懸念される。元来「心の居場所」や「心理的居場所」といった概念は学校現場や臨床現場といった「現場」の立場からの問題提起により注目され始め, 実証的研究の対象とされるようになった。現場で行われている実践は先述してきたとおりエビデンスに基づいたものは少なく, また効果の検討も十分になされていないため, 実証的研究に反映する意義があるとは断言しがたい。しかし居場所研究の成り立ちに上記のような背景があることから, 現場での実践を無視したまま研究を進めることで, 今後も居場所研究の成果が居場所づくりの実践に還元されないのではないかと危惧される。よってここでは居場所づくりの研究・実践報告を概観した結果を基に, 実践に還元しうる居場所研究を行う上での課題を4点挙げる。

第一に, 適応のレベルという視点の導入である。最初に論じたとおり, 居場所の議論は不登校問題に端を発する。居場所づくりの研究・報告を概観した結果, 不登校を始めとする不適応状態にある者を対象とした居場所づくりでは, まず不適応状態に寄り添うために, 「安心感」や「被受容感」, 「本来感」といった感覚を提供することが重要視されていた。その後適応の促進のために, 「承認による自信」や「有能感」の提供が段階的になされていると解釈できた。しかし居場所という言葉が広く一般に用いられていることから, 居場所の問題は不適応状態にある者だけが抱えるものではなく, 同時に居場所づくりは不適応支援だけを指すものではないだろう。文科省の施策に基づいて行われている居場所づくりでは, その対象の多くが学校に適応している子どもたちであった。さらに学校教員による学級経営としての居場所づくりや, プログラムとしての居場所づくりにおける対象も, 適応状態にある子どもたちであり, いずれも重要視されている点が上述の不適応状態にある者を対象としたものとはやや異なる。例えば学級経営としての居場所づくりでは, 「安心感」や「被受容感」という感覚の提供もいわれているが, 子どもが活躍できる場面の提供やそれを褒めるといった「承認」や「有能感」の提供がより重要視されていると推定される。このことから, 居場所感とは誰にとっても一義的なものではなく, 対象者の適応レベルや精神的健康のレベルにより重要視する要素が異なるのではないかと仮定される。よって今後, 心理的適応や学校適応のレベルという視点から重要視される居場所感の要素の検討を行うことが必要であろう。

第二に, 居場所欠乏感(「居場所がない」という感覚)の検討についてである。本来居場所づくりとは, 背景に対象者の「居場所がない」という感覚(以下, 居場所欠乏感とする)があり, その感覚を

解消するために手立てを講じることであると考えられる。しかし現在行われている居場所づくりには, その視点が反映されていないものもみられた。例えば文科省の施策の下に行われている青年期を対象とした居場所づくりでは, 上記の「安心感」, 「被受容感」, 「本来感」, 「承認」, 「有能感」といった要素に加え, 自分たちの過ごしたいように過ごすことができる「自由」や, 教師や親から支配されない, いわゆる「プライベート」が重要視されていた。先述してきた通り, 青年期の居場所づくりの特長は中高生の要望を反映させている点であるが, その要望を問う際の質問が対象者の「居場所」を質しているのではないことが問題であった。よって今後の課題として, 対象者が居場所欠乏感をもつ状況や原因を調査し, それに基づいて実践内容を評価, 改善していく必要があると考える。

第三に, 居場所づくりの定義と効果の測定についてである。居場所づくりの報告を概観した結果, そのほとんどで居場所づくりを定義しないまま実践が行われていた。それに伴い効果の検討が十分になされていないものが多く, 対象者に適応的な効果をもたらしていても, それを居場所が形成されたと判断することに懸念が残った。一方で上述してきたとおり, 松田(1999)および木下(2013)は居場所づくりを居場所感の促進という視点から捉え, 実践研究を行っている。さらに木下(2013)は居場所感の視点から介入効果の測定を行い, 居場所づくりの研究に重要な示唆を与えている。このように居場所づくりを居場所感の促進と定義し居場所感の視点から効果の測定を行い, 研究を蓄積していくことで, 居場所づくりの実践内容を発展させることにもつながると考えられる。

第四に, 居場所感の構造の発達段階における差異の検討である。上述の通り, 文科省の施策では居場所づくりの対象は「すべての小中学生」とされているにも関わらず, 小学生と中高生を明確に区別した居場所づくりが多数行われ, そのメリットについても示されている。このことより小学生と中高生では居場所に求めるものが異なる可能性が予想される。また中高生の居場所づくりでは「自由」や「プライベート」が重要視されていることが特徴であったが, 小学生の居場所づくりではのびのび, 生き生き過ごせる, といった「楽しさ」や「充実感」が重要視されていた。このことは青年期と児童期における居場所感の違いを示すものと考えられ, 今後このような居場所感の発達段階による違いについて実証的に研究する必要があると考えられる。

以上4点の課題に関する実証的研究および実践研究が蓄積されることにより, 今後居場所づくりの実践の発展に重要な示唆が与えられると考えられる。

## 引用文献

- 阿部直美(2010). 宿泊所「コスモスハウスおはな」 その人らしく生きられる“終の場所”―安心して過ごせる居場所をつくる(特集 尊厳のある最期を“看護”が支える一病院でも施設でもない「終の場所」) コミュニティケア, 12(13), 24-28.
- 安達由美(2012). 気になる子どもを含めた全員に実際の居場所と心の居場所を(特集 気になる子の居場所をつくる) 月刊学校教育相談, 26(5), 34-36.
- 安藤頌子・森美仁子, 高石 優(2005). “けやきコミュニティセン



- ター”の今一たまり場から次の展開へ(特集 居場所づくりの構想) 月刊社会教育, **49(1)**, 24-32.
- 青木典子 (2000). 病院から地域への移行期における精神分裂病者の居場所づくり 高知女子大学紀要 看護学部編, **49**, 55-66.
- 青木典子 (2004). 統合失調症者の居場所づくりに関する家族の関わり—病院から地域への移行期において— 家族看護学研究, **9(3)**, 88-97.
- 青木洋子 (2012). 四月, 改めて出会う(特集 気になる子の居場所をつくる) 月刊学校教育相談, **26(5)**, 26-29.
- 新井信幸 (2003). 豊かな高齢社会へ, 安心居場所づくり—高根台団地で今取り組まれていること(特集 公団住宅の建替えとは何か—住民の目線で問い直す)—(皆が住み続けるために, 計画へ住民参加), 建築とまちづくり, **317**, 31-34.
- 荒川厚子 (2005). 福岡県小郡市における二つの「週末チャレンジ教室」 マナビィ, **53**, 14-15.
- 嵐山町青少年健全育成委員会 (2004). 事例紹介 埼玉県嵐山町「嵐山町地域子ども教室」 マナビィ, **40**, 13.
- 浅井妙子 (2006). シリーズ企画(6)NPO 活動は今 合いことばは, 子どもも, 大人も, 行こう, 行こうはらっぱへ! あそぶ・つどう・そだちあう 街中の子どもの大人の居場所づくり 子どもの文化, **38(2)**, 32-37.
- 伴 義孝・田村典子・片倉道夫・相奈良律・植木隆光 (2008). 大阪府レクリエーション協会の「あそびの城づくり」について: その思想性と 21 世紀のレクリエーション運動 身体運動文化フォーラム, **3**, 27-132.
- 趙 玫姪・小伊藤亜希子 (2005). 全児童対策事業における居場所づくりの課題: 大阪市「児童いきいき放課後事業」と世田谷区「新BOP」の事例を通して(建築計画) 日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系, **45**, 201-204.
- 大辞林 (2003). 居場所 三省堂
- 江戸川区教育委員 (2003). 事例クローズアップ すくすくスクール事業—江戸川区の放課後等の居場所づくりへの取組 マナビィ, **30**, 24-26.
- 榎井 縁 (2005). 共生のトポス (39) 平和と共存のためのおまつり 地球一周事業—「子どもの居場所づくり新プラン」の実践 解放教育, **35(6)**, 85-87.
- 深山祐司 (2005). 福岡県小郡市における二つの「週末チャレンジ教室」 マナビィ, **53**, 14-15.
- 福岡和敏・大井康成 (2011). 「団地ステーション」による, 高齢者の買い物支援と居場所づくり(特集 買い物弱者支援事業の事業構造と今後の展望) 生協運営資料, **261**, 30-38.
- 福山素弘 (2003). 地域に開かれた公民館 (2) 文部科学省優良公民館 子育て支援と子どもの居場所づくり 月刊公民館, **554**, 30-33.
- 福安嘉久 (2007). 居場所 子どもの居場所づくりプロジェクト(全国自治体シンポジウム 2006「子どもにやさしいまち」を創る)—(「子どもにやさしいまち」を深める) 子どもの権利研究, **10**, 108-110.
- 布施利之 (2005). 公民館での「居場所」づくり, 公民館からの「居場所」づくり(特集 居場所づくりの構想) 月刊社会教育, **49(1)**, 45-50.
- 藤本健太郎 (2012). 社会的孤立を防ぐ居場所づくり 週刊社会保障, **66(2693)**, 46-51.
- 藤沢殊恵 (2006). 報告 2 引きこもりの若者たちの居場所づくり—引きこもりから社会へ(公開シンポジウム 子ども・若者の参画とまちづくり—千葉からのメッセージ) 日本社会教育学会紀要, **42**, 151-153.
- 我謝 工 (1999). こどもの心の居場所づくりをめざして(中学校)(特集 児童の権利条約と学校教育) 学校運営, **41(6)**, 24-27.
- 岐阜民間保育園カリキュラム研究会・奥美佐子 (2004). 4 歳児 四歳児の「居場所づくり」を心がけて(特集 平成 15 年度「私たちがつくる指導計画」まとめと課題) 保育の友, **52(3)**, 22-24.
- 拝野佳生・夏野良司 (1999). 学校内におけるフリー・スペースのもつ意義: 「心の居場所」を求め続けた子どもたちの事例分析 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 747.
- 花嶋裕久 (2011). ひきこもりの若者の居場所と就労に関する研究: 居場所から社会に出るまでのプロセス 心理臨床学研究, **29(5)**, 610-621.
- 半澤真司 (2004). 自分の場所をみつけるために 情緒障害児研究紀要, **23**, 65-68.
- 長谷夏哉・斎尾直子 (2006). 都市に育つ子どもたちの放課後の居場所づくりに関する研究: 安全安心と豊かな空間確保 両立の視点から(子どもとまちづくり(2), 都市計画) 学術講演梗概集. F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 2006, 549-550.
- 榛東地域子ども教室実行委員会 (2004). 事例紹介 群馬県榛東村「北小地域子ども教室」 マナビィ, **40**, 12.
- 東内慶太・大垣直明・前田光也 (2012). 北海道共生型基盤整備事業に関する基礎的調査(地域施設と市場, 都市計画, 2012 年度大会(東海)学術講演会・建築デザイン発表会) 学術講演梗概集 2012(都市計画), 505-506.
- 平野和弘 (2007). 心を少しひらかせるために—居場所づくりから学びの場の構築へ(小特集 今子どもが生きている世界にどう向き合うか) 教育, **57(6)**, 77-82.
- 廣井いずみ (2000). 「居場所」という視点からの非行事例理解 心理臨床学研究, **18**, 129-138.
- 広島県廿日市市立宮内小学校 (2006). ルポルタージュ「子ども会」との連携による人間関係づくりを一進見せる「子どもの居場所づくり」広島県廿日市市立宮内小学校 悠, **23(2)**, 48-51.
- 北海道岩見沢市教育委員会女性青少年課 (2007). 北海道岩見沢市岩見沢市における放課後児童クラブと児童館活動との連携の取組について 厚生労働, **62(3)**, 57-59.
- 本庄宏行・三橋伸夫・渡辺真季 (2006). 「ゆうこう子ども教室」を事例とした子どもの居場所づくり活動の実態と課題: 子どもの居場所づくり活動における地域施設の利用に関する研究 その 1(教育・福祉の地域施設, 農村計画) 学術講演梗概集. E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2006, 473-474.
- 本庄宏行・三橋伸夫・渡辺真季 (2007). 「栃木県地域子ども教室推進事業」を事例とした子どもの居場所づくり活動の実態と課題: 子どもの居場所づくり活動における地域施設の利用に関する研究 その 3(地域資源の活用, 農村計画) 学術講演梗概集.

- E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2007 471-472.
- 本庄宏行・三橋伸夫 (2010). 横浜市を事例とした放課後の子どもの居場所づくり活動の実態と課題 (コミュニティ再生とNPO, 農村計画) 学術講演梗概集. E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2010, 539-540.
- 本庄宏行・渡辺真季・三橋伸夫 (2009). 小学校施設を利用した子どもの居場所づくり活動の実態と評価に関する研究: 放課後子ども教室推進事業を事例として (地域施設, 農村計画) 学術講演梗概集. E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2009, 625-626.
- 堀 徹造 (2006). 目的地は東京湾 川と歩いた三六人 (特集 子どもの居場所づくりと総合学習) 解放教育, 36(9), 27-34.
- 星野 論 (2012). 子どもと一緒に, 地域と一緒に「有機的な子どもの居場所づくり」 社会教育, 67(5), 78-81.
- 兵庫県教職員組合 (2001). 大震災後の子どもたち (特集 子どもの居場所づくりー学級世界をひらく) 解放教育, 31(4), 66-75.
- 五十嵐宜子・定行まり子 (2004). 新宿区立榎町児童館における参画による居場所づくりの試み: 中高生の生活と居場所に関する研究 その9 (子どもの居場所・学童保育, 建築計画 I) 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2004, 493-494.
- 池田一男 (2003). 子どもたちの参画と居場所づくりーらいとびあ 21 解放教育, 33(8), 15-20.
- 池田徳幸 (2004). 施設紹介 介護老人福祉施設「総合ケアセンターリバー・イン」(埼玉県川口市) 「ご利用者と一緒に楽しむケア」で楽しく, 安心できる居場所づくりを 地域ケアリング, 6(2), 69-71.
- 池谷辰仁・木下誠一・今井正次 (2005). 青少年のための居場所づくりの方向性: 地域施設における青少年のための居場所づくりに関する研究 その2 (建築計画) 東海支部研究報告集, 43, 601-604.
- 生田紅美・定行まり子 (2007). 三鷹市における協働プロジェクト「子どもと行きたいコミセンづくり」の有効性: 地域における居場所づくりのプロセスと住民参加手法に関する研究 その2 (設計プロセス参加, 建築計画 I) 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2007, 613-614.
- 今西正一 (2001). トイレからの学校改革ー生徒の居場所づくりをめざして (特集 これからの学校建築をめぐる課題) 学校経営, 46(8), 24-30.
- 今野正保 (2003). 放課後, 土曜日の子育て支援の実態 (第4回子どもの心・体と環境を考える会学術大会記録) 子どもの健康科学, 4(1), 36-40.
- 乾 亨・延藤安弘・藤田 忍 (2006). 「生き活きとした人生」を創出する高齢者のための居場所づくりーイタリアの「社会センター」と日本の「まちの縁側」の比較研究 住宅総合研究財団研究論文集, 33, 289-300.
- 石本雄真 (2010). 居場所と友人関係の観点からとらえる青年期の学校適応 神戸大学大学院人間発達環境学研究所 平成 21 年度 博士論文 (未公開)
- 石沢恵理 (2013). 実践事例3 「毎日こうみんかん」の実践とその考え方についてーアートワークショップを活用した地域の居場所づくり (特集「講座」センスに磨きを) 月刊公民館, 668, 14-19.
- 板橋正枝 (2001). Aちゃん元気だね (特集 子どもの居場所づくりー学級世界をひらく) 解放教育, 31(4), 29-36.
- 板橋誠啓 (2006). 全校ヒューマンタイムから学級へ (特集 子どもの居場所づくりと総合学習) 解放教育, 36(9), 43-50.
- 岩切 準 (2005). ひとりひとりが輝くことのできる環境醸成をめざしてー「場」としての居場所づくり 社会教育関係団体 夢職人 月刊公民館, 579, 13-17.
- 岩手県水沢市教育委員会 (2004). 実践事例 地域が支える居場所「ホワイトキャンパス」ー岩手県水沢市 (特集 居場所づくりの工夫), 月刊公民館, 560, 4-7.
- 角川峯子 (2001). 子どものつぶやきをつないで (特集 子どもの居場所づくりー学級世界をひらく) 解放教育, 31(4), 37-48.
- 門谷和雄・佐藤正二 (2002). 教育施設における流動型外部空間 (オープンスペース) と関連させた教育環境創りの実践と展開 (2002 年度大会 (北陸) 学術講演梗概集) 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2002, 97-98.
- 神谷義直 (2005). File1 パソコンが取りもつ仲間づくり, 居場所づくりー介護予防拠点施設 IT 工房「くりっく」の活動をとおして (実践ファイル No.64) ふれあいケア, 11(8), 60-62.
- 上條秀元 (2007). 高齢者の居場所づくりについての一考察: 「ふれあいサロン」の活動に即して 生涯学習研究 宮崎大学生涯学習教育研究センター研究紀要, 12, 1-20.
- 神奈川県 NPO 法人でっかいそら (2011). 障がいがある人の居場所をつくるー神奈川県/NPO 法人でっかいそら (人と人をつなぐ実践) 月刊福祉, 94(12), 76-79.
- 神田亜子 (2007). 事例紹介④ 大分県臼杵市「すみれ放課後児童クラブ」の取組, 厚生労働, 62(3), 59-61.
- 金丸まや・渡海裕司・鈴木 毅・舟橋國男・木多道宏 (2000). 佐倉市ヤングプラザの計画プロセスの分析: 中高生の居場所づくりの試みとに関する研究 その1 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2000, 555-556.
- 金丸まや・渡海裕司・鈴木 毅・舟橋國男・木多道宏・李 斌 (2001). 日常生活における「佐倉市ヤングプラザ」「ゆう杉並」の使い方の分析: 中高生の居場所づくりの試みに関する研究 その3 (子供・居場所, 建築計画 I) 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2001, 1097-1098.
- 兼松忠雄 (2005). 喫茶コーナーが開く「その先」へー働く場, そして居場所として (特集 居場所づくりの構想) 月刊社会教育, 49(1), 39-44.
- 兼松 渉・藤岡泰寛・大原一興・三輪律江・妹尾理子 (2009). 中高生の居場所に求められる要素とその必要性に関する研究: 保土ヶ谷区天王町ハッピースクウェアを事例として(放課後の居場

- 所,建築計画Ⅰ 学術講演梗概集. E-1, 建築計画Ⅰ, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2009, 87-88.
- 金地喜世子・角井良子・木村千代子・太山由佳 (1998). 精神障害者が住みやすい地域づくりを目指して 地域環境保健福祉研究, 2(1), 1-4.
- 鳥山子どもの居場所づくり委員会 (2004). 事例紹介 栃木県鳥山町「若鮎クラブ」 マナビィ, 40, 11.
- 笠松文子 (2012). 「笑って帰れる教室」を目指して:居場所づくりのお手伝い(ライフステージと表現・ダンス:こことからだをつなぐ)ー(生涯スポーツ ダンスムーブメント) 女子体育, 54(6・7), 48-51.
- 加登田恵子 (2002). 「住民主体の福祉活動づくり」におけるソーシャルワーカーの課題ー障害児の放課後の居場所づくり活動の実践から 社会福祉実践理論研究, 11, 61-73.
- 加藤 理 (2002). 具体的事例 行政 滋賀県のエコ・スクール 滋賀県エコ・スクールプロジェクトの試みー子供たちの居場所づくりからの出発(特集 21世紀の環境教育はどうあるべきか) リサイクル文化, 67, 79-85.
- 川淵俊太郎・福田由美子 (2006). 「地域子ども教室推進事業」に対応する小学校建築のあり方に関する研究:廿日市市立M小学校におけるケーススタディ(建築計画) 日本建築学会中国支部研究報告集, 29, 505-508.
- 川口和正 (2006). 市民起業家という生き方(第28回) レストランからデイサービスまで自分たちの「居場所」をつくるーNPO法人 高齢社会の食と職を考えるチャンプルーの会 企業診断, 53(8), 78-81.
- 川井保子 (2005). PTA が中心になった「図書館を子どもの居場所に」愛媛県四国中央市立金井第一小学校ほんわかくらぶ 教育委員会月報, 57(8), 18-19.
- 川上慶子 (2008). 地域社会における中高生世代の居場所づくり実践に関する研究ー長野県茅野市こども館「CHUKO らんどチノチノ」の実践から 国立青少年教育振興機構研究紀要, 8, 13-23.
- 川俣理恵・河村茂雄 (2007). 中学で長期不登校を経験した女子生徒への高校相談室での居場所づくりを基盤とした援助 カウンセリング研究, 40(4), 287-294.
- 川本愛一郎 (2008). 幸運に出会う作業療法!実践こそ幸運の扉を開ける!ーその人がそのまま認められる居場所探し・居場所づくり・自分らしさ新発見伝! (特集 生きる力を支える作業療法) 作業療法ジャーナル, 42(1), 17-22.
- 河村茂雄 (1998). たのしい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」実施・解釈ハンドブック(小学校編) 図書文化
- 河村茂雄 (1999). たのしい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」実施・解釈ハンドブック(中学校編) 図書文化
- 河原塚達樹 (2006). PROPOSAL 『プレイフェア』を活用して子どもの居場所を元気に「つながれない子どもたち」に人と関わる楽しさと豊かさを(特集 2子どもの居場所のコーディネート) 社会教育, 61(2), 32-36.
- 川島美保 (2004). 慢性疾患とともに生きていく思春期の子どもの仮の居場所づくり 高知大学学術研究報告. 医学・看護学編 53, 29-40.
- 河田 誠 (2005). 自閉症者の居場所づくり 作業療法, 20, 158.
- 香山哲哉 (2005). 総合的な子どもの居場所づくりー「川崎市子ども夢パーク」ー 子どもの権利研究, 6, 13-16.
- 粥川道子 (2008). 青少年の居場所づくり 札幌市中央勤労青少年ホームの運営事例から 北翔大学生涯学習システム学部研究紀要, 8, 21-33.
- Khasawneh Fahod・Kato Akikazu・Shibayama Yoriko (2010). ANALYSIS ON INNOVATIVE CAMPUS LEARNING COMMONS DESIGN IN LIGHT OF EMERGING PEDAGOGIES: A Study of Problem Based Learning as a Place Maker in University Facilities 学術講演梗概集. E-1, 建築計画Ⅰ, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2010, 1069-1070.
- 橋川恵介 (2013). 実践事例1 魔法少女のまちづくりー若者の居場所づくり「アイドル養成講座」への道(特集「講座」センスに磨きを) 月刊公民館, 668, 4-8.
- 木下誠一・池谷辰仁・今井正次 (2005). 三重県青少年居場所づくり事業の居場所形態:地域施設における青少年のための居場所づくりに関する研究 その1(建築計画) 東海支部研究報告集, 43, 597-600.
- 木下誠一・池谷辰仁・今井正次 (2008). 中高生の「居場所」の成立条件に関する研究:三重県における居場所づくり事例の分析を通して 日本建築学会計画系論文集, 73(623), 39-46.
- 木下智彰 (2013). 児童の心の居場所をつくる教育実践の検討 奈良教育大学教職大学院研究紀要 学校教育実践研究, 5, 31-40.
- 小林真一 (2004). 教育支援最前線 生涯学習リポート 週末は自然体験で子どもの居場所づくり:国立山口徳地少年自然の家 週刊教育資料, 857, 30.
- 小泉初恵 (2005). 老いの住みか 訪ねある記(2) 神奈川・ノンちゃんの家「ひだまり」 高齢化した“ニュータウン”で居場所づくり 女性のひろば, 312, 110-115.
- 小久保裕之 (2012). 保護者相談と並行して取り組んだBさんの居場所づくり(特集 気になる子の居場所をつくる) 月刊学校教育相談, 26(5), 37-39.
- 國分康孝 (1992). 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房
- 駒井貞治 (2010a). 借家における子供の居場所づくりのためのセルフリノベーション(建築計画) 日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系, 50, 13-16.
- 駒井貞治 (2010b). 子供の居場所づくりのためのセルフリノベーション・システム(住宅の改修,建築計画Ⅱ) 学術講演梗概集. E-2, 建築計画Ⅱ, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2010, 127-128.
- 近藤ふみ・定行まり子・五十嵐宜子 (2004). 既存施設の転用による居場所づくり:中高生の生活と居場所に関する研究 その8(子どもの居場所・学童保育,建築計画Ⅰ) 学術講演梗概集. E-1, 建築計画Ⅰ, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2004, 491-492.
- 近藤ふみ・定行まり子 (2005). 中高生世代の居場所づくりのプロセス:中高生世代の生活と居場所に関する研究ーその10ー(学童保育・児童館,建築計画Ⅰ) 学術講演梗概集. E-1 建築計画Ⅰ 各



- 種建物・地域施設 設計方法 構法計画 人間工学 計画基礎  
2005, 451-452.
- 近藤ふみ・定行まり子・生田紅美 (2007). 三鷹市における協働プロジェクト「子どもと行きたいコミセンづくり」の実践：地域における居場所づくりのプロセスと住民参加手法に関する研究 その1 (設計プロセス参加, 建築計画 I) 学術講演梗概集, E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2007, 611-612.
- 小西秀和 (2009). 数納賞 小規模多機能児童館の可能性—独自事業から公的事業への展開—高学年の障害のある児童の居場所づくりの実践報告 (第33回 (平成20年度) 数納賞入選実践報告) 児童研究, 88, 99-107.
- 越野由香 (2011). 高機能自閉症児の自己肯定感と子ども集団—通常学級での取り組みから— 実践女子短期大学紀要, 32, 13-23.
- 高地朋子 (2010). 小学校学級経営における子どもの居場所づくりの視点の探求—a 教師の事例調査に基づいて— 教育経営研究, 16, 24-32.
- 小路谷守昌 (2009). 浦幌子ども居場所づくり事業「オーラポロひろば」の開設について 北海道十勝郡浦幌町中央公民館 月刊公民館, 624, 14-17.
- 倉持香苗 (2010). 地域の居場所づくりにおけるネットワーク構築の可能性—大分県別府市におけるコミュニティカフェ実践からコミュニティソーシャルワーク, 6, 54-59.
- 倉島ひろみ (2007). 男たちの居場所づくり—「松溪ふれあいの家」(特集 団塊世代の実像) 月刊ゆたかなくらし, 307, 32-35.
- 桑田茂土 (2008). 長期入院を活かしての患者に合った退院調整—この患者は病棟にいるべきか(日本精神科看護学会 第15回 専門学会(2)看護研究論文) 日本精神科看護学会誌, 51(3), 253-256, 200.
- 前田信一 (2007). 子どものくらしと居場所づくり—とうきょうの自治, 66, 2-6.
- 前島麻美・井上千子 (2012). インタビュー・ルーム(846)全ての子どもに居場所づくりを 厚生福祉, 5930, 5.
- 馬上和祥・横内憲久・岡田智秀・川島正嵩 (2011). 持続可能な景観まちづくりに関する研究：(その2) 岐阜県恵那市岩村町富田地区の景観形成要因 (伝統的建造物, 都市計画) 学術講演梗概集, F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 2011, 325-326.
- 丸谷 由 (2007). 域社会における「教育構造の再編」に関する一考察—「地域子ども教室推進事業」の実践を通して— 琉球大学生涯学習教育研究センター研究紀要, 1, 67-77.
- 増田 剛 (2001). CLOSE UP 建築 多治見中学校 (岐阜県多治見市) 生徒のための「居場所」をつくる 日経ア・キテクチュア, 706, 8-15.
- 益川浩一 (2005). 子ども・若者の「居場所」づくりに関する事例分析—愛知県豊田市井郷地区交流館の「井郷子ども塾」事業への参与観察を手がかりに— 中部教育学会紀要, 5, 29-44.
- 松田孝志 (1997). 現代高校生における居場所の内包的な構造 筑波大学教育研究科カウンセリング専攻修士論文抄録集, 31-32.
- 松田孝志 (1999). 試行錯誤の居場所づくり (シンポジウム「治すカウンセリング」から「育てるカウンセリング」へ) カウンセリング研究, 32(1), 95-98.
- 松田孝志 (2010). 新学期, 居場所づくりのポップ・ステップ・ジャンプ (特集 学級のトーンを育てる出会いの場づくり) 月刊学校教育相談, 24(5), 12-15.
- 松本歩子・中山 徹(2008). 放課後の居場所づくり事業「放課後子どもプラン」における学童保育機能の実態把握—一体化事業である事例からの考察(学童保育等, 建築計画 I) 学術講演梗概集, E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2008, 223-224.
- 松本歩子・中山 徹 (2009). 放課後の居場所づくり事業「放課後子どもプラン」における学童保育機能の実態把握：連携事業である事例からの考察 (放課後の居場所, 建築計画 I) 学術講演梗概集, E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2009, 85-86.
- 松本歩子・中山 徹 (2010). 放課後の居場所づくり事業「放課後子どもプラン」における学童保育機能の実態把握その3：全国の自治体を対象としたアンケート調査からの考察 (学童保育 (1), 建築計画 I) 学術講演梗概集, E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2010, 607-608.
- 松本すみ子 (2005). キーワードは「青春フラッシュバック」と「自分探し/居場所づくり」—松本すみ子氏と語る団塊シニアの素顔 (特集 団塊シニアのニーズをつかめ) 商工ジャーナル, 31(5), 16-19.
- 松本由宇貴・宮澤 仁 (2012). 草加松原団地における建替えにともなう高齢者の社会関係の変化と居場所づくりの取り組み (特集：多様化する福祉) お茶の水地理, 51, 44-57.
- 南 保輔 (2012). 居場所づくりと携帯電話：薬物依存からの「回復」経験の諸相 成城文藝, 221, 158-135.
- 三輪律江・藤岡素寛・高見沢実・佐土原聡・田村明弘 (2004). 地域活性化のため子どもを中心にした実践的取り組み：商学協働による商店街活性化に関する研究 その9 (市民参加まちづくりプロセス, 都市計画) 学術講演梗概集, F-1, 都市計画, 建築経済・住宅問題 2004, 727-728.
- 文部科学省 (2005). 教育支援最前線 生涯学習レポート 子どもの居場所づくり, 啓発普及ビデオ製作 週刊教育資料, 902, 30.
- 文部科学省生涯学習政策局子どもの居場所づくり推進室 (2004). 子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業の実施にあたって 教育委員会月報, 56(2), 2-25.
- 文部科学省生涯学習政策局社会教育課放課後子どもプラン連携推進室 (2007). 「放課後子どもプラン」の創設について (特集 放課後の子どもの安全で健やかな居場所づくりに向けて—総合的な放課後対策「放課後子どもプラン」の創設について) 教育委員会月報, 58(12), 5-10.
- 文部省初等中等教育局 (1992). 学校不応対策調査研究協力者会議 登校拒否 (不登校) 問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して
- 森口健司 (2001). 出会いをつくる…私の学級びらき (特集 子どもの居場所づくり—学級世界をひらく) 解放教育, 31(4), 49-58.

- 盛永由衣・片方信也・小伊藤亜希子・廣瀬雄一 (2006). 地域住民が集えるまちなかの居場所づくり活動に関する研究：運営者に対する調査から (建築計画) 日本建築学会近畿支部研究報告集. 計画系, 46, 77-80.
- 諸富祥彦・浅井好・明里康弘・植草伸之・斉藤優 (2002). エンカウンターで学級づくりスタートダッシュ! (中学校編) 日本図書文化協会
- 棟方秀和 (2005). キャンパスが舞台となった「子どもの居場所」ゆうごう子ども教室「青森中央キッズカレッジ」(青森中央短期大学) マナビィ, 53, 12-13.
- 村瀬嘉代子・重松正典・平田正子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文 (2000). 居場所を見失った思春期・青年期の人びとへの統合的アプローチ—通所型中間施設のもつ治療・成長促進的要因— 心理臨床学研究, 8, 221-232.
- 村田敦子 (2007). 現場からのレポート 居場所づくり からと里山ジュニアクラブの誕生 (特集 学校との連携) 更生保護, 58(8), 28-31.
- 村山弘美・佐藤留美 (2005). 第2の社会人デビュー 55歳からの居場所づくり 週刊朝日, 110(25), 35-39.
- 中川浩孝 (1998). 不登校の研究：教師・親の望ましい支援のあり方 情緒障害教育研究紀要, 17, 217-224.
- 中道保子 (2001). 「あいうえお」からおもいをつづるまで (特集 子どもの居場所づくり—学級世界をひらく) 解放教育, 31(4), 17-28.
- 中野直毅・工藤 良 (2009). NPO 田川ふれ愛義塾の軌跡と現状：「遊び・非行型」不登校生や社会で苦しみ悩む青少年によりそって 部落解放研究：部落解放・人権研究所紀要, 195, 93-104.
- 中崎隆司 (2004). CLOSE UP 建築部分を集合させて「居場所」をつくる—伊達の援護寮 (北海道伊達市) 日経アーキテクチュア, 779, 8-14.
- 中島喜代子・山中章子・松崎明日香・井上真理子 (2013). 中高生の居場所形成のための公共施設利用に関する研究：中高生に対する調査 三重大学教育学部研究紀要, 64, 115-124.
- 中島喜代子・吉川静香・山中章子 (2011). 中高校生の居場所形成のための公共施設利用促進に関する研究—公共施設管理者に対する調査 三重大学教育学部研究紀要, 62, 75-86.
- 名古屋市教育委員会 (2004). 事例紹介 2 トワイライトスクール事業—名古屋市の放課後等の居場所づくりへの取組— 教育委員会月報, 56(2), 16-17.
- 難波 淳 (2005). 合併を契機に「子どもの居場所」が広がる雲南市 マナビィ, 53, 10-11.
- 西出美子 (2004). 教育支援最前線 生涯学習レポート こどもクラブ事業の充実を目指して：地域と共に子どもの居場所づくりを 週刊教育資料, 867, 34.
- 西村和代・西村 仁志 (2007). 大学学外施設を利用した「子どもの居場所づくり」の意義 同志社政策科学研究, 9(2), 1-16.
- 西村憲次・藤井廣徳 (2010). 高齢者の居場所づくりとしてのふれあいデイハウス NPO 法人ほがらか (特集 地域から問う高齢者介護の願いと現実) 福祉のひろば, 126, 24-27.
- 西野博之 (2006). 不登校とフリースペースの歩み—「たまりば」から公設民営の「えん」へ— 子どもの権利研究, 8, 35-38.
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する実証的研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科 平成19年度 博士論文 (未公開)
- 野澤令照・相馬誠一 (2004). 相馬誠一のそこが知りたい 生徒指導 Q&A 第18回 不登校児童生徒の居場所づくり—「児童の杜」「杜のひろば」による支援— 月刊生徒指導, 34(1), 56-58.
- NPO 法人福岡県就労支援事業者機構 (2012). 仕事という“居場所”をつくる 福岡県 NPO 法人 福岡県就労支援事業者機構 (人と人をつなぐ実践), 月刊福祉, 95(13), 72-75.
- NPO 法人神戸オレンジの会 (2012). ひきこもりの子どもをもつ親たちの活動と「居場所」づくり：兵庫県 NPO 法人神戸オレンジの会 (人と人をつなぐ実践) 月刊福祉, 95(13), 76-79.
- 岡村清子 (2005). 地域三世代統合ケア—小規模多機能ケアと居場所づくり 老年社会科学, 27(3), 351-358.
- 小川幸裕 (2006). 「福祉拠点」に関する研究：地域における子どもの「居場所」づくりの事例から 北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集, 9, 39-47.
- 小川幸裕 (2009). 子どもの居場所づくりを通じた知的障害者家族のアイデンティティ形成のプロセス 北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集, 12, 81-89.
- 尾木直樹・奥地圭子 (2001). 連載対談 尾木直樹の教育を語りませんか(第4回)子どもの目線で考える居場所づくりを 悠, 18(7), 30-35.
- 奥地圭子 (2006). フリースクールが求めてきたもの—東京シューレ20周年を迎えて— 子どもの権利研究, 8, 28-34.
- 大橋寿美子・志村結美 (2013). 居住地域におけるもうひとつの居場所の形成—自宅開放事例にみる運営・使われ方実態調査から— 湘北紀要, 34, 223-230.
- 大村千恵 (2004). 事例紹介 2 子どもと大人が一緒になって居場所づくり マナビィ, 32, 13-15.
- 大阪市教育委員会 (2004). 事例紹介 1 児童いきいき放課後事業—大阪市の放課後等の居場所づくりへの取組— (特集 子どものいばしょづくりについて) 教育委員会月報, 56(2), 16-17.
- 大島嘉恵 (2001). 心地良い空間・居場所づくりって (全国保育問題研究会提案・特集 第40回全国保育問題研究会・大阪) — (分科会提案 保育時間と保育内容) 季刊保育問題研究, 188, 259-263.
- おやこの広場びーのびーの (2001). NPO の取り組み NPO びーのびーの編—共に育ち学び合う居場所づくり 0歳~3歳児とその親のためのもうひとつの家を目指して (特集 少子化対策—地域における子育て支援を考える) 厚生, 56(3), 25-27.
- 頼あゆみ・松本真澄 (2005). 計画住宅地における住民の“居場所づくり”について—多摩ニュータウンにおける活動事例 PRI review, 18, 18-25.
- 李 智 (2011). 居場所づくりと支援者の役割：岩手県奥州市ホワイトキャンパスを事例に 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60(1), 215-274.
- 斎尾直子・長谷夏哉 (2007). 都市における児童の居場所づくりの多様化と安全安心・豊かな空間確保両立についての考察：こども達

- の放課後の居場所づくりに関する研究 日本建築学会計画系論文集, **614**, 33-39.
- 埼玉県志木市 (2010). 現地ルポー自治体編 ご当地体操と居場所づくりで高齢者の健康を増進—埼玉県志木市の取り組み 介護保険, **15(175)**, 3-6.
- 齊藤真沙美 (2008). 緊張の高い不登校男児に対する「居場所」づくりの援助—スクールカウンセラーとしてののかかわりを通して— カウンセリング研究, **41(4)**, 323-332.
- 齊藤美香・飯田昭人・川崎直樹 (2011). 学生相談における多層的支援—居場所づくりの試み— 北翔大学北方圏学術情報センター年報, **3**, 143-149.
- 榎原美徳 (2004). 事例紹介 1 トワイライトスクール マナビィ, **32**, 10.
- 阪本光男 (2000). 北から南から—いま楽しい学校生活をつくる (73) 目黒の子どもの居場所づくり 月刊生徒指導, **30(1)**, 8-11.
- 櫻木邦浩・斎尾直子・藍澤 宏・瀧川佐江子 (2002). 学生の1日における行動パターンから見た大学キャンパスの居場所づくりに関する研究: 東京工業大学を事例として (2002年度大会 (北陸) 学術講演梗概集) 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2002, 95-96.
- 猿渡智衛 (2008). 子どもの居場所づくりに関する政策の現状と効果, 課題 弘前大学大学院地域社会研究科年報, **5**, 53-74.
- 佐藤将之・早川典子 (2005). 博物館を中心としたまちのネットワーク構築の実践: 子どもの居場所づくりを通して考察する場所の質 (コラボレーション・ワークショップ(2)・設計情報, 建築計画 I) 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2005, 619-620.
- 関原美和子 (2009). 現場の風 特別支援教育を訪ねる (第4回) 学校と様々な外部機関が支援体制を組み, 子どもに「居場所」づくりを—埼玉県志木市立志木小学校 総合教育技術, **64(6)**, 84-87.
- 島川和美 (2005). PTAが主体となって運営されている「子どもの居場所」徳島県徳島市「川内南地域子ども教室」 マナビィ, **53**, 8-9.
- 清水嘉永 (2011). 上田市施策担当者の「講座実践」—「居場所」づくりの視点から シリーズ多言語・多文化協働実践研究, **13**, 74-80.
- 下関地域子ども教室実行委員会 (2004). 事例紹介 山口県下関市「清末・あそびっ子・クラブ」 マナビィ, **40**, 14.
- 園田雅春 (2001). 学級づくりの可能性 (特集 子どもの居場所づくり—学級世界をひらく) 解放教育, **31(4)**, 8-16.
- 園田雅春 (2006). 子どもの居場所と総合学習実践 (特集 子どもの居場所づくりと総合学習) 解放教育, **36(9)**, 14-19.
- 末藤美津子 (2011). 外国につながる子どもたちへの教育支援—多文化共生社会の構築をめざして— 東京未来大学研究紀要, **4**, 9-16.
- 杉本希映・庄司一子 (2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達の変化 教育心理学研究, **54**, 289-299.
- 角田妙子 (2000). SERIES 居場所をつくる 1 グループホームふうせん Shelter-less, **7**, 3-8.
- 住本克彦・富永良喜 (2000). 親子宿泊体験活動が不登校の子どもに与える影響に関する一考察 発達心理臨床研究, **7**, 21-32.
- 鈴木明美 (2003). 非行少年グループへのスクールカウンセラーの介入—学校での「居場所」作りを中心に— カウンセリング研究, **36(4)**, 464-472.
- 鈴木ちひろ・石崎一記 (2011). 援助的サマースクールの研究 (IX その6) 東京成徳大学臨床心理学研究, **11**, 84-92.
- 鈴木信子 (2005). 夢を語り続ける女性との面接, 心理臨床学研究, **23(2)**, 233-243.
- 彦田奈津子・黒野智子 (2006). インファントマッサージを用いた育児支援の試み 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, **14**, 163-168.
- 高橋真琴 (2010). 発達障害のある子どもたちへのインフォーマルな「居場所づくり」の取り組みについて—ボランティアと子どもたちとの関わりを通して— LD 研究, **19(2)**, 157-166.
- 高橋たか子 (2005). 新潟県聖籠中学校の居場所づくり—脱成長・共生の視点から (特集 居場所づくりの構想) 月刊社会教育, **49(1)**, 33-38.
- 竹内範子・上野由利子・前田喜四雄・玉村公二彦・越野和之 (2009). 特別な配慮を必要とする幼児の教育的支援—感情の起伏が激しく気持ちのコントロールがしにくい幼児を支える集団づくりの実践を通して— 教育実践総合センター紀要, **18**, 157-163.
- 瀧脇 憲 (2010). 「生活保護受給者の社会的な居場所づくりと新しい公共に関する研究会」報告 精神保健福祉, **41(4)**, 300-302
- 田中文平・松浦洋栄 (2001). ひとつの切実な自己表現として (特集 子どもの居場所づくり—学級世界をひらく) 解放教育, **31(4)**, 76-85.
- 田中 悠 (2009). 居場所づくりを大切に, 青年の「二重の苦しみ」に心よせて (第2回 職場問題学習・交流講座 2009年4月25~26日) 前衛, **845**, 116-119.
- 田中京子 (2001). 「あのう, 今いいですか?」—子どもの居場所づくりをめざした相談活動 月刊学校教育相談, **15(6)**, 1-159.
- 田中 茂 (2007a). 自治体の立場からみた「放課後子どもプラン」への期待 厚生労働, **62(3)**, 49-51.
- 田中 茂 (2007b). 自治体の立場からみた「放課後子どもプラン」への期待 教育委員会月報, **58(12)**, 11-13.
- 田中悠美子 (1992). 不登校児の居場所—適応指導教室から (心教研 お茶の水女子大学心理・教育研究会 研究集会報告) 人間発達研究, **17**, 62-64.
- 谷口延彦 (2001). 地域の人たちとともにつくる『総合的な学習の時間』(特集 子どもの居場所づくり—学級世界をひらく) 解放教育, **31(4)**, 59-65.
- 時岡晴美・岡本侑記 (2011). 地域における子どもの居場所づくり活動について—放課後子ども教室に注目して 香川大学教育学部研究報告 第1部, **136**, 47-58.
- 時岡晴美・岡本侑記 (2011). 地域における子どもの居場所づくりの課題と将来像: 「放課後子ども教室」の取り組み事例を中心として 日本建築学会四国支部研究報告集, **11**, 73-74.



- 徳谷章子 (2009). 地域総がかりの子育て支援活動—すべての人の居場所づくり—子どもの文化, **41**(4), 20-23.
- 東京都世田谷区教育委員会 (2004). 新BOP (Base of Playing) —世田谷区の放課後等の居場所づくりへの取組—(特集 子どもの居場所づくりについて) 教育委員会月報, **56**(2), 22-23.
- 東京都品川区教育委員会 (2004). 事例紹介3 すまいるスクール—品川区の放課後等の居場所づくりへの取組—(特集 子どもの居場所づくりについて) 教育委員会月報, **56**(2), 20-21.
- 東京都杉並区児童青少年センター (2000). 行政実務最前線レポート 地域での中高校生の居場所づくり—「ゆう杉並」の取組み(東京都杉並区児童青少年センター) Gyosei EX, **12**(11), 2-4.
- 津の里ミュージアム実行委員会 (2004). 事例紹介 佐賀県津市「津の里ミュージアム」 マナビィ, **40**, 15.
- 内山 悠 (2013). 中学生の居場所づくり活動「MONDAY ROOM 北 遊魂」 同志社政策科学院生論集, **2**, 73-76.
- 鶴殿 巖 (2006). 中高生世代の居場所「バコハ」と子ども市民憲章—高浜市—子どもの権利研究, **8**, 43-47.
- 上田一成 (2004). 実践事例 地域が支える居場所「ホワイトキャンパス」 岩手県水沢市 月刊公民館, **560**, 4-7.
- 植戸貴子 (2008). 知的障がいのある人たちの地域の居場所づくり—意義と課題— 神戸女子大学文学部紀要, **41**, 87-97.
- 請川滋大 (2008). 放課後の子どもたちの居場所づくり(1): 幼稚園の「預かり保育」について考える 日本教育心理学会総会発表論文集, **50**, 506.
- 請川滋大・高橋健介・滝澤真毅・結城孝治・中川乃理子・中市朋美 (2009). 放課後の子どもたちの居場所づくり (2): 放課後子ども教室を行う小学校での保護者に対する質問紙調査 日本教育心理学会総会発表論文集, **51**, 438.
- 和田健司・後藤純子・阪本百合 (2006). 生活科「見つけよう!つながっていこう!町たんけん」(特集 子どもの居場所づくりと総合学習) 解放教育, **36**(9), 20-26.
- 渡辺真季・三橋伸夫・本庄宏行 (2006). 「ゆうこう子ども教室」における地域施設の利用形態と意識: 子どもの居場所づくり活動における地域施設の利用に関する研究 その2 (教育・福祉の地域施設, 農村計画) 学術講演梗概集. E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2006, 475-476.
- 渡辺真季・三橋伸夫・本庄宏行 (2007). 「栃木県地域子ども教室推進事業」における地域施設の利用形態と意識: 子どもの居場所づくり活動における地域施設の利用に関する研究 その4 (地域資源の活用, 農村計画) 学術講演梗概集. E-2, 建築計画 II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育 2007, 473-474.
- 渡海裕司・金丸まや・鈴木 毅・舟橋國男・木多道宏 (2000). ゆう杉並とヤングプラザの利用実態の分析: 中高生の居場所づくりの試みとに関する研究 その2 学術講演梗概集. E-1, 建築計画 I, 各種建物・地域施設, 設計方法, 構法計画, 人間工学, 計画基礎 2000, 557-558.
- 矢吹一馬 (2006). 学童保育実践の記録 こうだいのかわりを通して—誰もが輝ける居場所づくり (学童保育実践の探求) 学童保育研究, **7**, 78-91.
- 矢幡久美子 (2003). コラージュのなかの文字表現 居場所探しのテーマ 心理臨床学研究, **21**, 450-461.
- 山田喜浩 (1998). 学校現場での取り組みから 一人ひとりの子に, 仕事を, 責任を, 喜びを 学級活動を通して—勢いがつくこの時期だからうねりだけで進めないで— 総合教育技術, **53**(8), 64.
- 山口 聡 (2012). ケンタとハンドボール部の仲間たち (特集 気になる子の居場所をつくる) 月刊学校教育相談, **26**(5), 30-33.
- 山辺町家庭教育支援連絡協議会 (2004). 事例紹介 山形県山辺町「作谷沢こどもクラブ」 マナビィ, **40**, 10.
- 山路憲夫 (2011). 第一回コミュニティ・カフェ研究会「コミュニティ・カフェって何?—地域の協働と居場所づくりを考える」シンポ報告 研究年報, **16**, 89-90.
- 矢野 泉 (2006). アジア系マイノリティの子ども・若者の居場所づくり 横浜国立大学教育人間科学部紀要. I, 教育科学, **8**, 261-273.
- 八尾市立柱小学校 (2006). あったかいまち西郡 地域の願いを公園づくりに(特集 子どもの居場所づくりと総合学習) 解放教育, **36**(9), 35-42.
- 安川大地・細田智久 (2010). 松江市2小学校における放課後子ども教室の実態調査の分析(建築計画) 日本建築学会中国支部研究報告集, **33**, "504-1"-"504-4".
- 安川大地・細田智久 (2011). 松江市2小学校における放課後子ども教室の実態と既往調査2校との比較分析: 松江市における放課後子ども教室の実態調査に関する研究その2 日本建築学会中国支部研究報告集, **34**, 525-528.
- 横山真貴子・長谷川かおり・竹内範子・堀越紀香 (2012). 幼稚園の4歳児クラスにおける環境構成と保育者の援助のあり方—新入児と進級児の環境移行に着目して— 教育実践開発研究センター研究紀要, **21**, 45-54.
- 横関恭孝 (2006). 中高生世代の求める居場所と「ゆう杉並」—杉並区—子どもの権利研究, **8**, 39-42.
- 横田静子 (2005). 十勝地域の地域精神保健システム 利用者が主体的に過ごせる居場所づくり(特集 明日の「地域精神保健モデル」を探せ!—広域,市町村, NPO, それぞれの戦略) 保健師ジャーナル, **61**(2), 122-127.
- 吉川桃子 (2013). 地域在住認知症高齢者の居場所をつくる心理臨床学的支援: 高齢者間の相互的交流と役割感に着目して 心理臨床学研究, **31**(4), 640-650.
- 吉岡千晶・高橋豪仁・岡澤祥訓 (2007). 奈良県における地域子ども教室推進事業に関する事例研究 教育実践総合センター研究紀要, **16**, 79-88.
- 吉岡知加子・佐々木美奈子 (2004). 少人数クラスの居場所づくり (特集 第43回全国保問研・熊本集会提案)—(分科会提案 乳児保育) 季刊保育問題研究, **206**, 62-66.
- 全国子ども連合会・子どもの居場所づくりで16年度報告書 (2005). 教育支援最前線 生涯学習レポート 創造力開発や生活技術の学びの場にも 週刊教育資料, **897**, 34.
- 全国子ども会連合会 (2005) 教育支援最前線 生涯学習レポート “子どもの居場所づくり”で事例報告, **883**, 30.